

目次

序文

ダニエル・エアロン 7

謝辞

アデル・ヘラー／ロイス・ルードニック 9

序章

アデル・ヘラー／ロイス・ルードニック 12

第一章

新しい政治

ジョン・ブエンカー 38

『マッシュズ』の急進主義者たち

ユージーン・リーチ 57

新しい黒人——アイデンティティと社会意識の探求（一九一〇—一九二二年）

アーネスト・アレン・ジュニア 94

第二章

新しい女性

ロイス・ルードニック 132

文化象徴と社会的現実としての新しい女性

エリザベス・アマンズ 150

新しい女性とニュー・セクシュアリティ

エレン・ケイ・トリムバーガー 178

第三章

新しい心理学

アメリカにおける精神分析の受容（一九〇八—一九二二年）

新しい心理学とアメリカ劇

ジョン・C・バーナム

サンフォード・ギフォード

フレッド・マシューズ

218

238

272

第四章

新しい芸術

アーモリーショーとその余波

アルフレッド・ステイグリッツの信念とヴィジョン

『マッシズ』とモダニズム

マーティン・グリーン

ミルトン・ブラウン

エドワード・エイブラハムズ

レベッカ・ズーリエ

296

309

340

356

第五章

新しい演劇

ブロードウェイに背を向けて

——アメリカの芸術劇場の始まり（一九〇〇—一九二〇年）写真でたどる小論

アデル・ヘラー

382

メアリー・C・ヘンダーソン

408

ジグ・クックとスーザン・グラスペル——ルールを作る人、ルールを破る人

ロバート・K・サルロス

418

第六章

最初のプロヴィンスタウン劇

ミリアム・ハプグッド・ドワイト

442

『貞節—対話』

ニス・ボイス

447

『抑圧された願望』

ジョージ・クラム・クックとスーザン・グラスペル

460

『表現方法を変えろ』

ジョージ・クラム・クック

482

『同時代人』——教会急襲の一挿話

ウィルバー・ダニエル・ステイール

499

プロヴィンスタウンのユージーン・オニール

バーバラ・ゲルブ

517

本書の執筆者一覧 528

編著者および訳者 530

訳者あとがき 531

索引 543

序 文

一九八七年六月、数百人がマサチューセッツ州プロヴィンスタウンに集まった。アメリカ文化の歴史的記録を断続的に活気づける創造性のほとばしりの一つを祝うためである。彼らが出席した四日間の会議は、プロヴィンスタウン・ブレイヤーズ・ケーブ・コッドの端にある避暑の基地から、演劇の革命を一九一五年に開始した才能ある作家や芸術家の集団に焦点をあてたものであった。

会議集会はこの「文化の瞬間^{とき}」の政治的・知的背景に関する講演を大々的に扱った。プロヴィンスタウンの文学的で、歴史的な面を歩いて巡り、その時代の視覚芸術についてビデオテープを使ったスライドショーを行い、それに主要な人物の写真による表示が加わって、快活な一九一五年のシーズンの雰囲気を再創造した。七五年前にブレイヤーズが書き、演じた最初四つの劇の上演がこの催しのハイライトで、ブレイヤーズの六人の子孫—ミリアム・ハプグッド・ドウィット、ビアトリックス・ハプグッド・ファウスト、ペーター・ステイール、ヒートン・ヴォース、テシム・ゾーラー、ジョエン・オプライエン—の存在によって、その魅力が増した。彼らはプロヴィンスタウンの思い出について語ってくれた。

もし彼らが成功したいなら、この会議のようなプロジェクトの推進者は、聡明で、我慢強く、機転がきき、それに幸運でなければならぬ。組織を動かす能力のあることがもちろん望ましいが、それに劣らず重要なのが、強い興味、元気よさ、有能な補佐を選ぶ能力、そのプロジェクトがするに値することを資金提供者に納得させられる能力である。主としてアデル・ヘラーとロイス・ルードニツクの尽力のお蔭で、五年間の立案、長きにわたる通信、通話、図書館での調査、面倒な会議などを重ねて、幸運なことについて本書の出版にこぎつけることができた。

『一九一五年 アメリカ文化の瞬間^{とき}』は、人間主義の考古学活動として、異なる学問分野間の共同研究として、あ

るいは文学および文化の歴史の濃縮した章として読める。無味乾燥な芸術の因習と社会的不公平に異議を唱えて、劇の表現形式や視覚芸術の表現形式に異議を唱えた反抗者たちは、決して無気力なボヘミアンではなかった。むしろ彼らだけだけでなく、私たちの時代にもびったりしていた。「臆病な歩み寄りや見せかけの精神」は、「ぎよっとするような懐疑心、愛のない生活、目的のない活動」で終わる。この本は私にとって、過去の出来事の祝典であり、空想的理想主義としてしばしば退けられてきたものが、もつと後の世代になれば、意義のある重要性を持ちうるという思い出のよすがとなるものである。

ダニエル・エアロン

マサチューセッツ州ケンブリッジ

一九九〇年

謝 辞

本書のアイディアは「文化の瞬間―はじまりは一九一五年」と呼ばれたプロヴィンスタウンでの会議（二九八七年六月）から始まった。それはマサチューセッツ大学（ボストン）との協賛で、ウォーフのプロヴィンスタウン・プレイハウスによって後援され、また一部は人文科学のための国の基金および人文科学と公共政策のためのマサチューセッツ財団からの助成金により可能となった。本書の準備は、一部、人文科学のための国の基金およびジョン・スローン記念財団からの助成金によって惜しみなく支援を頂いた。

本書にはとても多くの個人、図書館、ギャラリー、美術館、団体、教育機関が関わっていて、これらの素晴らしい協力がなければ、この仕事はとうてい達成できなかったであろう。すべての人たちの名を挙げ、十分な感謝をすることができないけれども、この企画に寄与してくださったすべての人々に深く感謝いたしております。

まず、本書のために、予想した以上の時間とエネルギーを費やしてくださった六人の個々の人々から受けた恩に對して謝意を表したいと思います。ロバート・ブラウン（アメリカ美術保存館リージョナル・ディレクター）、アール・デーヴィス、エリカ・ゴットフライド（ニューヨーク大学タミメント図書館）、ニック・マドモ（アメリカ美術保存館）、リチャード・シュミラー（アメリカ文化情報局）、ドロシー・スワードラヴ（ニューヨーク公立図書館ピリー・ローズ・コレクション責任者）。加えて、ジョシユア・ブラウン、ビル・カフ、イヴェット・ド・ローシユ、エミリー・ファナム、ダニエル・ヘラー、ドクター・クリスチャン・ジールハー、ドナートウ・モレノ、デール・ネイバーズ、ヤン・ラーミレイス、ジェニー・ラスバン、パット・ウィリスは、ご多忙の折から、この計画に時間をさいてくださった。「上記五名の所属先は本書出版当時のものを記載」

私たちの研究にあらゆる優遇を与えてくださったさまざまな図書館の中でも、とりわけイェール大学バイネツケ稀

観本および手書き原稿「保管」図書館、ハーバード大学ホートン図書館、議会図書館、ニューヨーク公立図書館（バグ・コレクション）、ニューヨーク公立図書館（ビリー・ローズ演劇コレクション）、ニューヨーク大学タミメント図書館には感謝申し上げます。

私たちの感謝の気持は、以下の関係各位にも捧げられている。アメリカン・ジュエイツシュ歴史協会、アーモン・カーター美術館、スミソニアン・インステイテュション・アメリカ美術保存館、アート・インステイテュート・オブ・シカゴ、ボルチモア美術館、ボストン公立図書館、シカゴ歴史協会、ステイ・ロアー、コロラド歴史協会、コロンバス美術館、デラウエア美術館、ハリエット・アンド・マーティン・ダイアモンド、ディンテンファス・ギャラリー、ベン・アンド・ビアトリス・ゴールドスタイン、グッゲンハイム美術館、ハーグ市立美術館、ハーシユホーン美術館、クラウシャー・ギャラリー、ロワー・イーストサイド・テネメント美術館、メトロポリタン美術館、マンソニーウイリアムズ・プロクター美術館、ミュージアム・オブ・ザ・ステイ・オブ・ニューヨーク、ボストン美術館、ニューヨーク近代美術館、ナショナル・ギャラリー（ワシントンD.C.）、ナショナル・ギャラリー（ロンドン）、ニューヨーク歴史協会、ソフィア・スミス・コレクション（スミス・カレッジ）、フィラデルフィア美術館、プロヴィンスタウン・アート・アソシエーション・アンド・ミュージアム、フラーンスワズ・アンド・ハーヴェイ・ラムバック、サランダー・オライリイ・ギャラリーズ、シヨムバーグ・センター・フォー・リサーチ・イン・ブラック・カルチャー（ニューヨーク公立図書館）、ソシエテ・アノニム、アンドレアス・スパイザー、ホイットニー・ミュージアム・オブ・アメリカン・アート。

「ファミリー・アルバム」のセクションの写真を提供してくださったアール・デーヴィス、ミリアム・ハプグッド・ド・ドウィット、イヴェット・イーストマン、ベアトリックス・ハプグッド・ファウスト、ジョエル・オブライエン、ルイス・シェイファー、ピーター・ステイール、ヒートン・ヴォース、テシム・ゾーラーの皆さんに恩を受けている。本書の劇を掲載する許可を与えてくださったウォルター・ペーカー・H・カンパニー（ボストン）、シアリアス・クック、ミリアム・ハプグッド・ドウィット、ピーター・ステイールに感謝している。

最後になってしまったが、この計画の始まりから完成に至るまでずっと支援を頂き、励ましてくださったラトガーズ大学出版局の編集者ケネス・アーノルドと彼のスタッフのメンバー、とりわけクリステイーナ・ブレイク、マリリン・キャンベル、バーバラ・コーペルにも心からの感謝の気持ちをあらわしたい。

アデル・ヘラー

ロイス・ルードニツク

一九九一年三月

序章

アデル・ヘラー
ロイス・ルードニツク

一九〇〇年にヨーロッパやアメリカの社会哲学者、政治学者たちは、二〇世紀を新しい至福の時代の夜明けであると断言した。それは平和の世紀であり、政治的・宗教的・経済的競争の終焉であつて、人間の歴史を死と破壊だけにしてきた戦争の終わりを示すもので、西洋文明は文明という進歩のらせん状の形をなして、あるところまで進展し、それまでの世代の文明化されていない野蛮性を受け入れなくさせた、と彼らは主張した。

一九一五年の夏、アメリカの社会平和と正義という至福の時代を創造することに捧げたニューヨーク市グリニッチ・ヴィレッジの男女からなる小集団が、第一次世界大戦の身動きできないような恐怖に直面し、今や四年間続く戦争の二年目に入ろうとしている。第一次大戦は、西ヨーロッパで一三〇〇万人の命を奪い、若者たちの世代を破滅させた。それは二〇世紀の、今後の戦争と革命のための地ならしとなるであろう。そして一九二〇年代にアメリカに住んでいる社会的・文化的・政治的夢想家の中の、より反抗的な声をほほ然らせた愛国熱とヒステリアの高まりの中で、まもなくアメリカ市民の生命とエネルギーを吸収するであろう。

ハチンズ・ハプグッドは、その回顧録『近代世界のヴィクトリア朝時代の人たち』の中で、一九一五年の夏は、マサチューセッツ州プロヴィンスタウンに年一回巡礼の旅をしてきたグリニッチ・ヴィレジャーズにとって絶望で始まつた、と私たちに伝えている。「すべての現存の理論は、無力であることがすでに示されていた。平和の快い創造的目的はもはやない。個々の人たちはそれぞれが崇高な人間であることをやめてしまつてゐる。みんなは待つてゐた。

生きるということが虚ろであった」と。アメリカで新しい種類の演劇を創造しようと全力を傾けていたプロヴィンスタウン・プレイヤーズが生まれたのは、この希望を失っていた時代であった。「プロヴィンスタウンの運動は、一部、再生をめざす―精神的に、意気阻喪や絶望からの回復をめざす、私欲の毒や世の中の毒からの解放をめざす、社会的な活動¹⁾」であったとハブグッドは私たちに言う。

創造性を持ったこの「文化の運動」が、一九八七年の夏にプロヴィンスタウンで催された会議に熱意を吹き込み、そこからこの評論集が生み出された。この会議は、アメリカ文化の「小さなルネサンス」―それはプロヴィンスタウン・プレイヤーズの誕生を育成した―を公に祝うものとして意図された。この会議の参加者は、一九一五年の七月と九月に、プレイヤーズによって書かれ、上演された最初四つの劇のテーマを伝える問題を検討した。

これらの問題―その一つ一つが、二〇世紀のアメリカ社会と文化の推移に深い影響を及ぼしてきた―が本書の焦点となつている。私たちは進歩的・急進的な政治、フェミニズム、精神分析、後期印象派、近代演劇の始まりなどが、アメリカの文化に及ぼした影響を検討し、一九一五年の世代が使った言葉―新しい政治、新しい女性、新しい心理学、新しい芸術、新しい演劇―を使って、それまでのアメリカと彼ら自身を区別しようとするものである。それらすべてに影響を及ぼした考え方の相互作用を究明することに加えて、これらの運動の一つ一つが本来持っているものを取り上げることによって、読者に広範囲なレンズ―そのレンズを通して、アメリカの生活を重要な文化の分岐点にあるものとして見ようとするものである―を提供する。

これらの運動を定義し、形づくるのに役立った男女は、アメリカ人の最初の世代の一部で、主要な都市の産業力として、また世界帝国としてアメリカがその姿を現わすことを引き換えに、人間に強いることになつた犠牲に彼らは反応を示している。「新しい」アメリカについて彼らの懐くヴィジョンには、穏やかなものから急進的なものに至るまで幅があった。しかし、それらすべての根底にあつたのは、自分自身と社会を作り直そうとする個々の創造的努力の力とアメリカの生活に人間性を与えようとする文化的表現の力によせる彼らの信念であった。これら二〇世紀初期の知識人・作家・芸術家、それに活動家たちは、二〇世紀の後半の終わり、彼らの子孫がいぜんとして直面している

問題の多くを取り上げようとした。集団の幸福を保護する一方で、個々の自由をも考慮に入れた公平で、民主的な社会を私たちはいかに創造するのか。みんなで生み出している国家の富を公平に分配するために、個々の主導権を敬い、労働者・女性・少数民族にも権限を与えるような、社会経済システムを私たちはいかに確立するのか。個人的なヴィジョンに応じ、アカデミックなエリートや特権的少数者以外の人たちに語りかける芸術・文学・文化批評の中心部分をいかに私たちは創造するのか。私たちは私たちのアイデンティティの、つじつまの合う情報源を提供し、なおかつ時々、男女がぶつかり合う文化、多様な民族的・人種的集団がぶつかり合う文化を組み込んだ、潑刺とした国の文化をいかに作りあげるのか。

これらの問いに答えるためには、二〇世紀の最初の二〇年間でのアメリカ人の生活がどのようなものであったかを、まず見なければならぬ。国民総生産と一人あたりの収入が一八八〇年から一九二〇年の間に二倍になったけれども、富は国民に均等に分配されていたわけではない。アメリカ人の三分の一から二分の一（それは黒人の大部分を含む）が貧しいか、それに近い暮らしをしていたので、病気が蔓延したり、アメリカが世界をリードしている産業で事故があれば、いつでもその割合は増えた。その頃、女性と少数民族の殆どが、市民権を剥奪されていた。²

アメリカ人が人的資源や天然資源を無茶苦茶に利己的利用したことで、中流および上流階級のいくつかの部分の間から、ある歴史家が「アメリカ人の良心の反乱」と呼んだものが生まれた。進歩的な改革者たちは、彼らが本質的に妥当だと信じていた政治システムを修正することに興味を示した。一八九〇年から一九一五年の間にアメリカにやって来た一千五百万人の新しい移民たちを含めた、幅広いアメリカ社会にアメリカ政府がもっとしっかりと反応を示すことを心底から願っていたことに動機づけられた進歩的な改革者たちもいた。彼らは自分たちの階級の利益を保護するためには、あるいは労働者階級の革命を防ぐためには、その社会経済システムを少なくとももつと衡平の原則によるものにしなければならないという懸念から、多くの者たちは動機づけられていた。³

リンカーン・ステファンズのような清潔な政治を願う改革者たちは、アメリカの実業界と政党幹部との癒着を指摘することによって、都市部の腐敗をさらけ出すことに尽力した。ウォルター・リップマンのようなインテリは、社会

科学者がこの国の産業経済を規制すべきであると主張した。なぜなら分別のある、公平な原則を前提とすれば、彼らは大多数の人々のために、商品、公共事業、人間の必要とするものの不均衡を調整する方向に向うであらうからである。ジェーン・アダムズのような、社会正義の進歩的な人々は、住宅の向上、産業労働者の安全、教育の機会拡大、文化的多様性へのさらなる寛容さ、といったような主義・主張を促進することによって、移民や労働者階級の人々の諸条件を改善するために努力した。サミュエル・ゴンパースのような穏健な労働者のリーダーは、産業界と提携して、「生活にかかわる」組合主義を求めて闘った。マークス・ガーヴェイのような黒人の民族主義者は、アフリカ系アメリカ人のコミュニティの要求や願望を満たすような黒人単独の経済を、と主張した。

急進的なリーダーたちは、中産階級アメリカと産業資本主義が根本的に持っている不健康を全面的に糾弾し、アメリカの政治的・経済的システムの、これまでにない根本的な変化を、つまり徴税と賃金統制によって、国家の富を再分配することから、労働者がオーナーの手から国家の富と生産手段を奪い取るまでの変化を要求した。芸術や社会生活の分野ばかりでなく、政治の分野における急進的な言説と実験を育む最も肥沃な土壌の一つは、ニューヨーク市であった。一九二〇年代までに、ニューヨークは確かにアメリカにおいて文化が発酵する主要な中心になっていた。グリニッチ・ヴィレッジに関しては、白人急進主義者の中心であり、ハーレムはアメリカ黒人の首都として進行中である。¹⁾

「今、その当時を振り返ってみると、一九一三年という年に至る所で障害がなくなつて、それまで連絡をとりあつたことのなかつた者同士が、連絡をとれるようになったかのように思われた。新しい通信手段ばかりでなく、通信するためのあらゆる新しい方法がそこにはあつた」とメイベル・ドッジ・ルーハン⁽⁵⁾あらゆる新しい運動の中で重要な人物―は彼女の回顧録で書いている。彼女が口にした新しい精神は、グリニッチ・ヴィレッジでその指導的地位を、五番街二三番の彼女のサロンに、その精神的家を見つけた。そこには、ヴィレッジに住んでいる男たちや女たちに、アメリカの政治方針ばかりでなく、良俗や芸術の基準を変えられることができるようになると思わせるような、心理学・芸術・詩・政治・男女関係の理論が充満していた。自由思想家や自由恋愛家は、彼らの信条・目標・急進主義の程度

において、本質的に異なつてこそいたが、ますます強くなりつつある標準化・機械化・物質主義に向けて、同胞の市民を追い立てんとしているアメリカ人の生活傾向と闘うことで、一致結束していた。それらの中には、効率と費用効果を重視するあまり、労働者を機械より下位に置く科学的な経営哲学、階級をさらに分離させ、教育を受けた者とそうでない者とを分けた仕事の分化、マスメディアの操作、幸福の追求はシアーズローバック「大手通信販売会社」のカタログを見ることにある、という神話を促進するような、急増している広告産業などが含まれている。

彼らの時代（そしてその後）の、より正統なマルキストとは違つて、彼らのそれは、正統なマルキストたちが労働組合の組織化と富の再分配に努力を捧げたと同じくらいに、その努力を自由な活動と自己表現に捧げた急激な変革であつた。ヴィレッジで受け取られていたように、あらゆる新しい運動をつないでいた明確な言葉は、「解放された個性」、「自己の表現」、「情緒」、「直観」、「解放」、「実験」、「自由」、「反抗」——これらの言葉遣いや単語は、一九一二年から一九一七年にかけての政府宣言、芸術品の展示会、政治集会ばかりでなく、「新しい」雑誌、本、劇などに広行き渡つていた傾向をほのめかしている、とダニエル・エアロンは記している。彼らはマクドーガル・ストリートのポリーズ・レストランで催されたりベラル・クラブの会合を伝えた。その会合では、詩の読書会、コロラド鉱山での抗夫たちの大量死についての講義、労働する女性には共同住宅が必要であるという議論などが、同程度の重要さで話し合われていた。そして異教徒の労働者の集団がワシントン・スクエアのアーチに登つて、ここは独立した共和国だと宣言するように仕向ける街頭演劇を彼らは推し進めた。⁶

この世代の芸術家、作家、改革者、急進主義者—グリニッチ・ヴィレッジ内とそれ以外の場所を含む—が、アメリカ社会と文化を生き返らせるためにいかに貢献したかを検討するにあつて、私たちは次の問いに取り組もうとしてきた。(一) 何をもって「新しい」と定義し、それは「古い」とどう違うのか。(二) 「新しい」もの—その多くがヨーロッパで始まっている—が、どのようにアメリカ化されたのか。(三) 「新しい」ものを創造する際に、どのような衝突やパラドックスが伴うのか。(四) 「新しい」ものが普及して、より大きな社会に取り入れられるようになる、その「新しい」ものはどうなったのか。(五) 二〇世紀アメリカの、その後の社会的・政治的・文化的運動に、その

「新しい」ものが、どのような影響を及ぼしたのか。

何をもって「新しい」と定義し、それは「古い」とどう違うのか　この文化的な特定の時を特色づける問題の分野を横断する一揃いの言葉がある。社会的な変化、文化的な変化、政治的な変化、というこれまでよりも多元共存主義的な擁護者によって、少なくともそれらが定義された時の言葉である―新しい女性、新しい心理学、新しい芸術、新しい政治、新しい演劇。これらのどれについて私たちが話していようとも、私たちは崩壊という言葉に直面する。二項対立の崩壊、形式至上主義の崩壊、境界線の崩壊、階層制の崩壊、そしてアメリカの生活のあらゆる領域における慣習の崩壊といった具合に。

「アメリカン・モダニズムの定義に向けて」という論文の中で、ダニエル・ジョゼフ・シンガルは、この世代をヴィクトリア朝の先祖と区別し、新しい文化的パラダイムを創造しようという彼らの試みを定義している目立った相違点を記す。ヴィクトリア朝の人々が、文明化されたものと野蛮なもの、上位の階層と下位の階層、白人と黒人、男性の領域と女性の領域、といった人生のすべての領域において、「対照的な区別立て」を行ったのに対して、個人を社会システムから分けて、それらを別々の区画に入れるといった、広く行われていたやり方をモダニストたちは拒絶した。「モダニズムの現われ方」はさまざまであったが、彼らに「共通した考え方というのは、……自己を経験という新しいレベルに開放したいとする熱い欲求に加えて、その経験する種類の本質的に異なる要素を一つに合わせて、新しい独創的な〈統一体〉―新しい文化の基礎としての〈統合的形態〉と言ってもよいほどのもの―に変えたいという熱い願望であった」。

分割されない、まるごとを求めるこの願望は、これまでの伝統的な宗教的形式によってはもはや満足できない、根深い精神的な欲求によって少なくとも一部は動機づけられていた。社会正義を求める進歩的な人たちの背後にある最も重要な勢力の一つは、プロテスタント聖職内部の社会的福音運動で、それは中流階級や上流階級の人々に対して、貧しい人々、社会から見捨てられた「不利な立場にある人々の生活」の意識を共有するように要求した。リベラル福音主義のプロテスタントイズムは、ユージーン・デブス（キリスト教は「活動中の社会主義」であると彼は宣言した）の

1915年 アメリカ文化の瞬間^{とき}

——「新しい」政治・女性・心理学・芸術・演劇

二〇一九年二月一五日 初版第一刷印刷

二〇一九年二月二五日 初版第一刷発行

編著者 アデル・ヘラー／ロイス・ルドニック

訳者 山本俊一

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1789-7 ©2019 Printed in Japan